

側妃志願！
2



エレイン

国王を愛する心優しい王妃。
なかなかお世継ぎがでない
ことに悩み、アイーダに
側妃になってほしいと頼む。

ウィルフリート

王宮の庭に現れる謎めいた青年。
アイーダの想い人でもある。
王宮の財宝を狙う盗賊団の
一員なのか、それとも――？

陛下

ロスシェイン王国の国王。
常に鉄仮面を被っている。実は
善人格で、アイーダは明るい方の
人格を隣の陛下、冷たい方の人格を
下の陛下と呼んでいる。

フィンディ

国王の側妃で、通称「赤妃」。
いかにもお世継ぎらしいお飛車な
態度を取るものの、本当は
心優しい少女。

常務さん

王宮に伴みつく謎の白猫。
でっぷりと太っており、爺つさと
態度もふてふてしい。

ラーセル

盗賊団「闇の蝙蝠」の一員。
捕縛された外敵の解放を
望んでいる。

アイーダ(お田満香)

異世界にトリップした元フリーター。
ささい好きで掃除が趣味。
専用のお風呂日当てで
国王の側妃になった。
黒髪なので「黒妃」と呼ばれている。

サラージア

国王の側妃で、通称「白妃」。
老婆のような口調で話す。
不思議な力を持っており、
占いや術が趣味。



目次

第一章	側妃披露の儀は、黒妃疲労の儀でした	7
第二章	初めての夜に、事件が起きました	72
第三章	仮面舞踏会に招待されました	158
第四章	深夜に怒涛の展開が待っていました	247

第一章 側妃披露の儀は、黒妃疲労の儀でした

な、何で、こんなことに……？

私——アイデアこと合田清香は、これ以上は無理というほどに身を縮こまらせた。

気分は最悪だ。ここじゃないところならどこでもいいから、とにかくどこかへ逃げ出してしまいたい。けどどうする訳にもいかず、群衆に向けてロボットみたいに手を振り続けていた。

今、私は他の側妃さんたちと一緒に馬車に揺られている。自分が乗って来た馬車もあるのに、なぜ三人揃って同じ馬車に乗らなければならないのだろうか？ 謎だ。

先程婚礼の儀が無事に終わり、私たちは馬車に乗って王宮まで移動することになった。国王陛下と王妃様は前の馬車に乗り、私たちと同様に国民の歓声を受けている。

私は恐々として他の二人に目を向けた。彼女たちは群衆に笑顔で手を振っているが、お互い決して目を合わせようとしない。二人の間には、どこか緊張感さえ漂っている気がする。

私の向かいに座っているのは、通称・白妃様。

白い髪をしていると聞いて、私は失礼にも獅子舞みたいな人をイメージしていた。だけど、当然そんなことはなく、絹糸みたいに艶やかな長い髪を持つ、とても美しい女性だった。

透けそうなほど白い肌、切れ長な葦色の目と小さな唇。まるで人形のように顔かたちが整っていて、謎めいた雰囲気を持つ人だ。その身体はモデルさんみたいにはっそりしている。

ドレスは黒く、ちらりと覗くペチコートは葦色だ。形は私のドレスと似ているものの、私のとは違って黒いレースがふんだんに使われている。ここが日本ならゴスロリとも呼ばれそうだが、黒い蝶々みたいでとてもよく似合っていた。

一方、私の横に座っている赤妃様は、燃えるように赤い髪をしている。その髪にはきつめのウエーブがかかかっていて、量も豊かだ。目鼻立ちがはっきりした派手顔の美人で、瞳の色は茶色がかかった緑色。鼻筋が通り口角がキュッと上がっている。

偽乳の私とは違い、その胸元にはくつきりした谷間があった。白いドレスの間隙から瞳によく似た色のペチコートを覗かせている。少々気の強そうな、生命力に溢れたお嬢様といった雰囲気だ。

そして私はいえ、髪が黒いために黒妃と呼ばれている……らしい。

二人に比べると、自分の容姿は何てみずばらしいのかと落ち込んでくる。鼻は低いし、目もつけまつげで二重を作っているし、胸は偽乳。自慢出来るところが一つもない。

一緒に並んだら、さぞ貧相に見えるだろうな……と徐々に落ちていく気持ちを無理やり上昇させて、私は自分たち三人の衣装に意識を向けた。

こうして見てみると、私たちの着ているドレスには、お互いの髪の色が取り入れられているみたいだ。そしてドレスの間隙から覗くペチコートは、各自の瞳の色に合わせてある。デザインや素材は異なるものの、これもある意味お揃いと呼べるかもしれない。

それにしても、侍女のエルさんたちから似合う似合うと褒められてちよつといい気分になっていたが、完全に衣装負けしている。再び落ち込みそうになった私は、何でこんなところにいるんだろう、と今までのことを振り返った。

私がこの世界にやってきたのは、今からちょうど三ヶ月半前。九月に入ったばかりで、まだ暑い日のことだった。

両親に先立たれ、親戚の家に厄介になっていた私は、高校卒業と同時に一人暮らしを始めた。資格も何も持っていなかったの、掃除という特技を生かし、清掃会社の派遣スタッフとして働くことでどうにか生計を立てていた。そんな日々が、この先もずっと続くと思っていたのだ。

だけど、異変は突然起きた。

その日、いつも通り派遣先で仕事を終えた私は、帰り際に曇った鏡を見つけた。無類のきれいな好きとしてはどうしても見逃すことができず、拭こうと手を伸ばした瞬間——何と、私は鏡の中に吸い込まれてしまったのだ。

今思い返しても信じられない話だけど、目が覚めると、そこは中世ヨーロッパ風の異世界だった。ビルもマンションもなく、周りは白人みみたいな人ばかり。

言葉も分からず途方に暮れていた私は、星見亭という宿屋兼食堂を営む、ベリンダさんとホルスさんという夫婦に出会う。彼らはとても親切で、私に食事を与え、おまけに住み込みで働かせてくれた。



星見亭での生活は快適だったが、困ったことが一つだけある。この世界では、庶民の家にお風呂がないのだ。お風呂が大好きな私にとって、それは死活問題だった。

そんな時、この国の王様が側妃を募集しているという噂を聞いた。側妃とは、王様の第二夫人のことらしい。その側妃になれば、毎日お風呂に入りたい放題じゃないか？ と考えた私は、無謀にも志願することにしたのだった。

き……気まずいっつ！

馬車の中は未だ会話のない状態が続き、非常にいたたまれない気分させられる。

何か話のきつかけはないものか——そんな私の願いが天に届いたのか、白妃様がこちらを向き、微笑みかけてきた。笑うとますます神秘的で美しい。私がすっかり見惚れていたら、その白妃様がようやく口火を切った。

「初めまして、黒妃よ。妾は白妃、サラージア・ハルベルダムじゃ。そっちの赤いのはよう知らぬが、よろしく頼むぞ」

白妃様の一風変わった言葉遣いに、私は意表を突かれる。そのせいで、返事をするのが遅れてしまった。すると私よりも先に、隣に座る赤妃様が口を開く。

「ふん、相変わらず変人のようですね、ハルベルダム侯爵家のご令嬢は」

「これはこれでご挨拶じゃな、フィンディ・アローガネス伯爵令嬢よ。気位が高すぎるゆえに結婚相手が見つからぬと聞いておったが、まさか側妃になろうとは」

「その言葉、そっくりお返しいたしますわ！　あなただって占いだか呪いだかに夢中になって、嫁き遅れたから側妃になったのではなくて？」

えーと。どうやら知り合いみたいだけど……何か二人の間に火花が散っているような？

私の困惑をよそに、言い争いは徐々に加熱していく。

「妾は嫁き遅れたのではなく、嫁かなかっただけじゃ。そなたと違ってな」

「まあ、何ですって!？」

私は険悪な空気を払拭するため、勇気を振り絞って大声を上げた。

「わ、私は黒妃のアイーダ・ベネトリージュですつ。よろしくお願ひします!」

会話を遮った私に、二人の視線が集中する。

……怖い。もしかしたら、選択肢を誤ったかもしれない。

「ベネトリージュ子爵様にこのような親類がいたとは、初耳じゃの」

「本当に。……ねえ、黒妃様。平民出身というのは本当なの？」

どうやらフィンデイさんは、私のことを少しだけ知っているらしい。

「はい、本当です。私の母はシグ……ベネトリージュ子爵の妹の夫の従妹の叔母の娘なんです、

平民である私の父と駆け落ち同然に結婚して……とにかく私は子爵とは遠い親戚で、この度、縁

あつて養女になりました」

これはシグルトさんが考えた言い訳だった。シグルトさんというのは、私の後見人かつ養父である子爵様だ。そもそも私がこうして側妃になれたのも、大臣である彼が側妃候補を募集してくれた

からだった。

側妃募集の情報を耳にした私はお化粧と胸パッドで装備を固め、集合場所であるミディブルという街の時計台広場へ向かった。

だけどそこに集まっていたのは、若くて可愛い女性ばかり。このままでは、夢のお風呂ロードは泡となって消えてしまう。

焦った私は、シグルトさんたち貴族を含め、その場にいた全員に向かって大声で宣言した。

「必ずや陛下を私の虜にしてみせます！　この顔と身体で!」——と。

シグルトさんにやる気を買われた私は、トントントン拍子に王宮までやってることができた。一度は陛下に追い出されそうになって、清掃女中として働いた時期もある。けれど、この度どうにか無事に側妃になれたのだった。

私の表向きの経歴は、後見人であるシグルトさんが考えてくれた。平民出身というのは少し調べれば分かることなので、嘘はつけない。シグルトさん曰く、身分が偽れないならば、出自を偽るまで……だそうで、私は黒髪の人がたくさんいるガルナタ大陸出身ということになっている。幸いガルナタ大陸は遠いので、詳細はいくらでもごまかせるはずだ。

この国では、跡継ぎ欲しさに養子を迎えたり、遠縁の子供を引き取ったりすることがよくあるそう。そのせいか、私が平民出身と知っても、二人とも侮蔑の表情は浮かべなかった。

「なんやよう分からぬが、今日からは同じ側妃の身。よろしく頼むぞ」

「わたくしも、仲良くしてさしあげても良くつてよ」

二人は、私が感情を表すのが苦手が無表情なことも、まるで気にしていない様子だった。おまけに、これからよろしくとさえ言ってくれている。

もっと冷たい態度を取られると思っていた私は、とても嬉しくなった。馬車の中なので座ったままだけれど、感謝の心を込めてペコリとお辞儀をした。

「こちらこそ、よろしくお願います」

こんな会話をしながらも、彼女たちは道の両側を埋め尽くす人々に手を振っている。さすがは貴族だ。

それにしても——と、私は先程の二人の会話を思い出す。どちらも私とそれほど歳が変わらないように見えるのに、サラージアさんはフィンディさんから嫁ぎ遅れと言われていた。若く見えるだけで、実は私よりうんと年上なのだろうか？

こっそり二人を見比べていたら、サラージアさんが私の視線に気付いた。

「何じゃ、妾たちに何か用かの」

「……失礼ですが、おいくつですか？」

遠慮がちに年齢を聞くと、サラージアさんは十七歳、フィンディさんは十六歳になったばかりだという。まさかの年下だ。二人とも大人っぽい外見をしているので、勝手に年上だと思いつ込んでいた。

逆に私の年齢を聞かれ、もうすぐ十九歳だと言うと、彼女たちは目を真ん丸にした。別に若く見える訳でもないと思うのに、どうしたというのだろうか。

今までの険悪なムードはどこへやら、二人は私を横目で見ながらヒソヒソ話をし始めた。

「十九になるまで相手が決まらなかつたなんて、この方、どんな欠陥があるのかしら？」

「待て、赤妃よ。平民は雇用主の意向で、とかく結婚が遅れるものと聞いたことがあるぞ」

……いや、全然ヒソヒソ話ではなかつた。元々声が大いのか、それともボリュームを下げる気がないのか。

いずれにせよ筒抜けだったので詳しく聞いてみると、普通、貴族のご令嬢は十代前半までに結婚相手が決まるものらしく、ともすると生まれる前から決まっていることもあるのだとか。親御さんに結婚相手を決められるなんて、昔ならいざ知らず、現代の日本で生まれ育った私にはとても違和感がある。

「妾は結婚などしたくはなかつたのじゃが、父上にどうしても泣きつかれての。だから言っつてやつたのじゃ、相手が陛下なら嫁いでも構わぬと。どうせお忙しい方じゃから、会うことも滅多になかろうと思うてな」

何と、サラージアさんはここに来る前の私と同じようなことを言っている。

「少しの時間だけ我慢すれば、王宮の希少な書物が読み放題じゃろう？ 妾は読書が趣味での。実はこの口調もお気に入りの書物の登場人物を真似ておるのじゃ」

少しの時間というのは、陛下との夜の時間という意味だろうか。とにかく側妃になることは、彼女にとって些細なことらしい。

読書のために側妃になるなんて、ちょっと理解しがたい。だけど、私もお風呂のために側妃に

なったので、人のことは言えない。その人にとって何が一番大切かは本人にしか分からないし、理解できないのはお互い様だろう。

それにしても、好きなキャラクターの口調を真似ていたとは。意外と可愛いところもあるものだ。「あら、わたくしはそれ相応の覚悟を持って参りましたわよ。せつかく側妃になったんですもの、必ずやお世継ぎを産んでみせますわ!」

フィンディさんは鼻息も荒く宣言した。わあ、頼もしい。

しかし、私たち三人の中で真つ当な動機を持っていたのが、何とフィンディさんだけとは。このことを聞いたら、王妃様は喜ぶだろうか？ それともガツカリするだろうか？

それというのも、王妃様はお世継ぎが生まれることを誰よりも願っている反面、陛下を心から愛していらっしやるので、他の女性との間に子供が生まれたら苦しむはずなのだ。

私が側妃になったのは、実はお風呂のためだけではない。側妃となって陛下の子供を産んで欲しいと、王妃様に頼まれたからでもある。

王妃様は、他国よりこのロスシェイン王国に嫁いでこられた。繊細な雰囲気を持つ絶世の美女だ。陛下とは相思相愛の仲だけど、結婚から二年経ってもお世継ぎが生まれなため、側妃を置くことになったのだという。

あの王妃様ラブの陛下が、フィンディさんとうこうなるとは思えない。だけでもしそうなれば、それはそれで王妃様の希望を叶えることにはなる訳で……

ああ、でも王妃様は、私に産んで欲しいと言っていた。王妃様がフィンディさんとも仲良くなれ

ば、彼女が産んでも構わないのだろうか？ もしそうなら、フィンディさんと陛下の仲を応援したいと思う。それとも王妃様が嫉妬に苦しまないように、二人の仲が深まるのを阻止するべき？ うーん、難しい問題だ。

どこからが浮気か？ という男女間の永遠の問題にまで考えが及びそうになって、私は慌てて頭を振った。

「そうキンキンした声を出さない。頭と耳が痛うて敵わん」

「何ですって!? あなたの方こそ、その魔女みたいな話し方はやめていただきたいわっ!」

やばい、二人が本格的に喧嘩を始めてしまった。それでも群衆に笑顔で手を振り続けているのが逆に恐ろしい。

私は喧嘩の仲裁をする代わりに、以前から気になっていたことを尋ねてみることにした。

「あの、陛下のことを怖いと思いますか？ その、仮面、とか……」

そう。国王陛下は仮面を被っているのだ。それも目元だけを隠すものではなく、頭をすっぽりと覆う仮面を。

しかし、不思議なことに、この国の人たちは陛下の仮面姿を別段気にしていないようだった。私が初めて見た時は、我が目を疑うほどの衝撃を受けたというのに。

侍女のアステイさんたちは「もう見慣れてしまったから怖くない」と言っていたし、私もそうなりつつあるけど、サラージアさんとフィンディさんはどう思っているのだろうか？ 二人の率直な意見を聞いてみたかった。

「確かに少々変わってはいるが、個人の自由ではないかえ？」

「陛下の政治手腕には脱帽すると、お父様がおっしゃっていただきましたもの。多少変わったところがあつたとしても、デキる男であれば文句はありませんわ」

二人は意外なところで意見の一致を見せた。頷き合うその様子は、さつきまで口喧嘩しては思えないほどだ。

「妾が初めてお目通りを許された時には、すでに仮面を被っていたからのう」

「わたくしもそうでしたわ。それに、お父様から前もって事情を伺っていましたから。心の準備もできていましたし」

私は二人の言葉に、なるほどと頷いた。

二人とも高位の貴族なので、仮面姿の陛下と会う機会はこれまで何度もあつたに違いない。おまけに、大臣職に就いているお父さんから事前に聞いていたなら、衝撃も少なかったことだろう。

有能なら仮面を被つても構わないというのは、アメリカ人みたいな大らかな考え方だなあと思つた。陛下がデキる人だというのは初耳だけれども。

二人が仮面のことを気にしていないのは分かったが、実は陛下には他にも問題がある。彼は何と、二重人格なのだ。

一つ目の人格は、冷たくて怖い陛下。そして二つ目の人格は、明るくて優しい陛下。私は二人の陛下を「陰の陛下」と「陽の陛下」と呼び分けている。

陛下が二重人格になつたのは、子供の頃に父親である先王を殺害してしまつてからなので、おそ

らく良心の呵責が原因だろうとシグルトさんが言つていた。

このスキャンダルは極秘中の極秘だからくれぐれも他言しないようにと、シグルトさんからきつく言われている。だから、陛下の二重人格をどう思うかについては、今は聞かないことにした。

「ほら、黒妃よ。手を振るのじゃ」

「そうですね。側妃としての義務をきちんと果たしませんと！」

手を振るのも忘れて考え込んでいたら、年下の二人に注意されてしまった。

……私としてはこの二人、とても気が合っていると思う。



王宮の黒くて大きな門を通り、広い庭園を抜けたところで、私たちはようやく馬車から降りた。先に到着した馬車の中に、陛下と王妃様の姿はない。すでに私たち王族の住まいである宮殿の中へ入つたようだ。

側妃披露の儀——つまり披露宴まではまだ時間があるので、私たちは一旦、各自の部屋へ戻ることになった。

私は侍女のアステイさんや警備の人たちと一緒に自室へと向かう。

アステイさんは今は私の侍女をしてくれているけれど、もともとは私が清掃女中として働いていた時の上司だ。そのきびきびとした言動は、厳格な女教師を彷彿とさせる。実際、私は彼女から礼

儀作法やダンスなど、貴族に必要な知識をこれでもかというほど教え込まれた。とても感謝している……けど、たまに鬼軍曹や悪魔に変身するのは、やめて欲しい。

私たちが住む宮殿は三階建てで、陛下と王妃様の部屋は三階に、側妃たちの部屋は二階にある。建物を正面から見て左側に白妃サラージャさんの部屋が、真ん中に赤妃フィンディさんの部屋が、右側に私の部屋があるのだ。

二人は今日からここに住み始めるので、何かしらの儀式をしてから部屋に入るらしい。フライングで入居していた私は、そのまま部屋へと戻った。

部屋にはすでに侍女のソフィアさんやエルさんがいた。元は私の女中仲間だったけれど、側妃になる際に侍女が三人必要だったため、アステイさんとともにスカウトしたのだ。

ソフィアさんはふんわりとした優しい雰囲気的女性で、出会った時から何かと世話を焼いてくれる。エルさんは赤毛の三つ編みがチャームポイントで、好奇心旺盛な女の子である。

二人は今朝の支度は手伝ってくれたけど、側妃行列や婚礼の儀にはついてこなかった。その間、お茶と軽食の準備をしてくれていたらしい。

これから始まる側妃披露の儀では、私たち側妃は出席者への対応に忙しくて食事を取る暇がないので、先に済ませておくべきなのだそう。だけど、あまり食欲はない。

「すみません、あまりお腹が空いていなくて」

「アイーダさん、そう言って最近、あまりご飯食べてないじゃないですか。そのせいで痩せちゃって、ドレスのサイズを直さなきゃいけなくなっただけでしょう？ いつか倒れちゃいますよっ！」

心配そうに言うエルさんの後ろから、ソフィアさんが「ふっふっふ、私に任せて！」とニコニコしながら顔を覗かせた。その手にあるのは上等な布に包まれた、小さくて四角い何かだった。

「そう言うと思って、とっておきのものを用意してあるのよ。さ、開けてみて」

自信満々なソフィアさんの様子を不思議に思いながらも、私はテーブルについて包みを開く。

すると、見覚えのある箱が姿を現した。驚きと同時に、ある予感に胸を躍らせながら蓋を開ける。

「これ……！」

予感が当たって、私は目を見開いた。ほんの少し前までは毎日食べていたけれど、もう二度と食べられないと思っていたもの。そう、ジェイクさんの作ったお弁当だった。

ジェイクさんは王宮の料理人である。私が女中として働き始めた日に庭で出会ってから仲良くなり、毎日一緒にお昼ご飯を食べていたのだ。……私が側妃になるまでは。

私のことを好きだと言ってくれたけど、彼の手を取ることはできなかった。最後は笑顔でお別れできたものの、こうやってまたジェイクさんの作った料理を食べられるとは思っていなかった。

色とりどりの野菜やおかずの中央に、私の大好きな卵焼きがある。しかも、これまでのようなスクランブルエッグ状ではなく、ちゃんと巻かれていた。

ジェイクさん、頑張って巻いてくれたんだ。「あー！ また失敗した！ くそっ」などと言いながらも、諦めないで挑戦するジェイクさんを想像して、胸が温かくなった。

「これなら食べたいと思えるでしょ？ さ、食べて食べて」

「ソフィアさん、ありがとうございます……いただきます」

私は手を合わせて軽く頭を下げる。この世界にこんな習慣はないけれど、今でもついやってしま
うのだ。

そしてフォークを手にする、お弁当を食べ始めた。

一口食べただけで分かる、懐かしいジェイクさんの味。卵焼きの他にも、私が美味いと言った
ものばかりが詰められている。

おかずの一つ一つに「頑張れ」というメッセージが込められている気がして、噛みしめるように
食べた。気持ちが上向いて、久々に食が進む。そんな私を見て、侍女の三人も安堵した様子だった。
「これからは、ジェイクに食事を作らせるのがいいかもしれないわね」

「ごちそうさまでした、と再び手を合わせた私を見ながら、アステイさんが言った。その言葉に、
私はすぐさま飛びつく。

「そんなことできるんですか？」

「側妃様たちを迎えるために厨房も人を増やしたようだし、不可能ではないはずよ。もちろん、毎
日という訳にはいかないけどね」

今後は陛下や王妃様、他の側妃さんたちと一緒に食事をする機会が定期的にある。食事だけでは
なく、お茶会に招いたり招かれたりすることももあるそうだ。貴族のご夫人やご令嬢から招待される
ことも多いのだとか。

だけどそういつた予定もなく私一人で食事を取る場合は、ジェイクさんに食事を作ってもらえな
いかと、アステイさんが料理長さんに交渉してくれるらしい。

料理長さん、承諾してくれるかな……してくれるといいな。

空になったお弁当箱を見つめながら、私は願った。

しばらく休憩していたら、側妃披露の儀の時刻が迫ってきた。

婚礼の儀ではティアラが目立つようにするため、他のアクセサリーをつけることは禁じられて
いた。

だけど、側妃披露の儀は違う。衣装はこれまでと変わらないが、ネックレスにイヤリング、ブレ
スレットや指輪など、思い思いに着飾って良いそうだ。

私は銀のティアラに合わせて銀色のネックレスを身に着ける。きっとこれも高価なものに違いな
い。百ロツシュは下らないよね。ううん、その倍以上かも。

ロジスやロツシュというのはこの国のお金の単位で、一ロジスは一円、一ロツシュは千円くらい
の価値がある。つまり百ロツシュは約十万円だ。

婚礼の儀で授与されたつかい宝石が付いたティアラは、一体いくらするんだろう……？ そう
思うと傷付けたり落したりしないかととても不安で、今すぐ外したくなる。

侍女の中でアステイさんだけは私の付添人として参加するので、彼女もいつもより豪華な侍女服
に着替えていた。

準備ができた私は、清掃女中時代に毎日掃除していた回廊を通って、会場である大広間へと向か
う。一時期、側妃になることを諦めていた私。その時はこの回廊を側妃として通ることになるとは

夢にも思わなかったので、とても感慨深い。

やがて私たちは大広間に着いた。ここ来るのは、初めて王宮に来た時以来だ。

当時はとてつもなく広く感じたけど、今は大勢の着飾った貴族の方々で埋め尽くされているせいで、少々圧迫感がある。

私に続いてサラージャさんとフィンディさんもやってきた。二人も先程より数段煌びやかな出で立ちだ。ただでさえ美しいのに、こうなるともう私は身の置きどころがない。

そして私たち三人は皆の前に立たされ、それぞれの紹介文が朗々と読み上げられた。最初は侯爵令嬢である白妃・サラージャさん。次に伯爵令嬢である赤妃・フィンディさん。最後が子爵令嬢である私だ。

婚礼の儀の時も、この順番で婚姻の誓約書に名前を書いた。やはり同じ側妃といえども序列があるらしい。

紹介によれば、サラージャさんは大変な才女で常に冷静沈着、フィンディさんは芸事に秀でていて社交的なんだそうだ。馬車の中でフィンディさんが、サラージャさんは占いや呪いに夢中だと言っていたけれど、そんな話は一切出なかった。

ちなみに私はいえ、平民出身ではあるものの、外国のとても裕福な家庭で育ったと紹介された。その言葉を聞いた時は、思わず「えっ!？」と声を上げそうになった。

更には、この国のことを深く知るために遠路はるばるやってきて、平民に紛れて暮らしていた、という真つ赤つ赤な嘘に度肝を抜かれる。

おまけに「家庭的な一面を持つ、素晴らしい女性でいらっしやいます」などと言われた時にはもう、唾然を通り越して呆然としてしまった。

私は生まれも育ちも庶民だし、星見亭で働いていたのも、生きるために仕方なくだ。それに家庭的と言っても私にできるのは掃除だけで、料理は作れなければ洗濯もあまり得意ではない。

衝撃冷めやらぬ私の耳に、今度は容貌についての褒め言葉が飛び込んできた。

……異国風デ神秘的ツテ、ソレ誰ノコトデスカ？

ただの和風なのっぺり顔なんですよ、化粧でごまかしてますけどね。

シグルトさんと目が合うと、彼は苦笑いしながら肩を竦めていた。「こればかりは今更どうしようもないよ」とでも言わんばかりに。

私たちの紹介が終わったところで、会場の隅に音楽隊が現れた。オーボエやヴァイオリンによく似た楽器が軽快かつ華々しい音を奏で、それに合わせてサラージャさんと父親の侯爵様がダンスを踊り始める。

彼らが踊っているのはラストダンスと言うらしい。父親と最後のダンスをした後に、結婚相手と最初のダンス——ファーストダンスを踊るのだそうだ。

そのしきたり通り、曲の切れ間に侯爵様が陛下にバトンタッチする。冷たくて怖い、陰の陛下、バージョンの陛下は、不機嫌そうに口をへの字にしていた。

それでも、陰の陛下はダンスがお上手である。美男美女……いや、陛下は仮面を被っているから顔は分からないけれど、何にせよ二人はとても優雅で絵になっていた。

王妃様の様子を窺つてみると、彼女は私の視線に気付いて少しだけ頬を緩ませた。陛下と同じ濃紺の衣装は、よく見れば細かい花柄の刺繍が入っている。襟や袖口は金糸で縁取られ、豪華な輝きを放っていた。王妃様は、その衣装にも負けないほど華があつて美しい。ただ、あまり楽しそうには見えない。今の陛下が王妃様の好きな陽の陛下ではなく、陰の陛下だからだろうか？

私には王妃様の気持ちを中心に理解することはできないけれど、彼女がお世継ぎ問題から解放されて、心穏やかな時間を過ごせることを祈った。

視線を会場の中央に戻すと、以前シグルトさんと火花を散らしていたおじさんがフィンディさんの手を取った。何と、彼はフィンディさんのお父さんだったようだ。あの時は平民出身の側妃候補を連れていたけれど、結局は自分の娘を側妃にしまったのか……

しばらくしてフィンディさんはラストダンスを終え、続いて陛下と踊り始めた。

するとシグルトさんが私のところへやってきて、胸に手を当てて軽くお辞儀をした。そして茶目つ気たっぷりな顔で、私をダンスに誘う。

「私と踊っていただけますかな？」

「はい、もちろんです。……お父さん」

シグルトさんをお父さんと呼ぶのは、とても照れくさくて、とても嬉しかった。「お父さん」という言葉を長い間、口にしていなかったからだ。両親を事故で亡くした私に、再びお父さんと呼べる人が現れるとは思ひもなかった。

私はシグルトさんの手に自分の手をのせ、陛下とフィンディさんの近くまで進み出る。

シグルトさんとは、初めてでありながら最後のダンス。彼は踊りが苦手な私を優しく巧みにリードしてくれる。なのに、少しだけ胸が苦しくなった。きっとシグルトさんが、娘の嫁入りを見送る父親のような表情をしているせいだ。

彼は若い頃に奥さんを亡くし、それ以来ずっと一人身らしい。もしかしたら私に、生まれてきたかもしれない子供を重ねているのだろうか。そうだったら、こんなに嬉しいことはない。だって私もシグルトさんに、死んだ父親を重ねているのだから。

「幸せになるんだよ、アイーダ」

「はい。必ず幸せになります。だから、心配しないでください」

シグルトさんは瞳を潤ませながら、微笑みを浮かべる。その手が離れる瞬間に、言いようのない喪失感を覚えた。

「ただその余韻に浸る間もなく、陛下が強引に私の手を取る。思ったよりも硬くて大きな手だ。

「ちよ、ちよと待ってくだ……あっ」

乱暴に引き寄せられてバランスを崩した私は、陛下の胸に倒れ込んでしまう。

「も、申し訳ございません！」

謝りますから、いきなり斬ったりしないでくださいね。あなたが力一杯引つ張るからいけないんですよ。決して私のせいではありませんので、そこそこをお忘れなきようにお願いしますっ！

「早く体勢を整えろ。こんな茶番、さっさと終わらせろぞ」

陛下が恐ろしく低い声で呟いた。不機嫌さ全開だ。

それでも、こうやってちゃんと結婚式や披露宴に出るなんて偉いと思う。まあ当然と言えば当然の話なんだけど、第一印象が最悪だったので、ちょっとしたことがとても良く見えてしまう。

陛下は女性として平均的な身長私よりも、ずっと背が高い。恐る恐る手を伸ばして陛下の肩にのせると、位置が高すぎて腕がすりそうになった。

ここまで近付くと、陛下の唇と顎がよく見える。唇は薄く、あまり色味がない。そして意外なことに、彼はそれほど色白ではなかった。

年がら年中、執務室や会議室に籠っているものと思っていたけれど、そうでもないのかもしれない。よく考えてみれば、視察とかであちこち出かけることもあるよね。

それに、いつも剣を持ち歩いているところを見ると、きっとたまには屋外で剣の練習でもしているのだろう。

そんなことを考えつつ、私は陛下と踊り始めた。

サラージャさんとフィンディさんは陛下と見事なダンスを披露していたけれど、私は全然ダメだった。くるくる回され、引きずられ、引つ張られ、まるでジェットコースターに乗った時みたいに悪酔いしてしまう。

き、気持ち悪い……吐きそう……！

相性が悪いのか、単に私が下手なのか。最後は放り出されるように手を離され、陛下は一度もこちらを顧みることなくどこかへ行ってしまった。

皆の注目を浴びながらのダンスがどうにか終わると、アステイさんが扇で風を送ってくれた。人が多かったため、冬だというのに熱気がすごいのだ。

「これから招待客の皆様が、ご挨拶にいらっしやいます」

「そうなんですか」

「……事前にお伝えしたはずですが？」

アステイさんの眉がつり上がり、私は平身低頭しそうな勢いで謝る。

「そ、そうでしたね。ごめんなさい、ダンスが終わったら気が抜けちゃって」

「アイーダ様、お言葉遣いが」

「ご……いや、申し訳ございません」

アステイさんは私を一瞬だけ睨んでからすぐに表情を戻し、「御髪をお直しいたします」と言って顔を寄せてきた。

「いい？ 笑顔になれとは言わないわ。だけど、しつかり挨拶するのよ！ くれぐれもお名前を間違えないようにね！」

アステイさんの表情はとつても怖くて、冷たい汗が背中を流れる。

そして彼女の言った通り、私たち側妃はたくさんの貴族さんに取り囲まれた。生まれつき無表情なので、にこにこ愛想よく振る舞えないのが辛い。その分、できるだけ丁寧な挨拶を返した。

だけど途中から誰が誰だかよく分からなくなって、ちょっとしたパニックになってしまった。カタ

カナ名を覚えるのは、元々とても苦手だった。

だから、それ以降は相手の名前を呼ばない方向で対処することにした。おかげでそばに控えているアステイさんの方には、怖くて視線を向けられない。

どうにか挨拶が一段落したところで、アステイさんが飲み物を手渡してくれた。眉と眉の間に深い縦ジワが刻まれているが、何とか及第点は取れたようで、私はほっと息をつく。

渡された果物のジュースを飲むと、ようやく周囲を見回す余裕が出てきた。

陛下の斜め後ろには、白地に金の刺繍が入った衣装を身に纏った男性が、数人立っていた。警備しているのだろうか？ いや、警備の人は大広間の四隅と出入り口にちゃんと立っているし、衣装も明らかに違う。

「あの、アステイさん。陛下の後ろに立っている人たちは誰ですか？」

「あれは騎士よ。側妃行列の時、馬に乗って併走していたでしょう？」

「ああ、確かにいらつしやいましたね」

私はなるほどと頷いた。彼らは馬車に併走していた時はマントを着ていたので、すぐには分からなかったのだ。

アステイさんによれば、騎士というのは陛下の身を守るために選ばれた精鋭部隊で、国民の憧れの的なのだとか。優れた剣の腕を持っていることはもちろん、貴族であることが条件なので、とても狭き門なのだという。

「じゃあ、彼らはエリートさんなんですね」

尊敬の思いで見えたら、私の目は、そのうちの一人に引き寄せられた。

背が高くて肩幅も広く、がっちりとしている。短く切られた髪は金色で、瞳は藍色。三白眼が目から眼差しは鋭い。会場にお祝いムードが漂う中、彼だけが張りつめた空気を醸し出していた。もともと、彼に注意を引かれたのはそのせいではない。…以前、どこかで見たことがあるような気がしたからだ。

どこでだろう。星見亭のお客さんだった訳でもないし、王宮に来てから会ったという訳でもないし。うーん、思い出せない。一目見たら忘れそうにない容貌なんだけど。

そんなことを考えていたら、その騎士さんは陛下に何かを命じられ、折り目正しく礼をしてから退室していった。

「あまりよそ見をするものじゃないわ」

「はい」

アステイさんに小声で注意されたので、視線を正面に戻す。そのうち司会者の男性が「これにて側妃披露の儀を終了する」と宣言した。とはいえ、招待客はここで解散する訳ではなく、今夜はそのまま踊り明かすのだそうだ。

私たちはこの場に残っても、部屋に戻ってもいいと、事前に言われている。早朝からのハードスケジュールで、もう体力の限界だ。一秒でも早く熱いお風呂に浸かって、疲れを取りたい。そう思っていたんだけれど――

最後にもう一度全員でグラスを手に取り、乾杯をした直後、司会者さんが思いもよらぬ発言を

した。

「では、これより陛下に今夜の床入りのお相手を決めていただきます」
ぶふーっ！

私は口に含んでいた飲み物を盛大に噴き出してしまった。

はっ？ 今、床入りって言った？ 床入りって、もしかして……しょ、初夜のこと？

そんなことを公衆の面前で言うなんて、どうかしている。だけど自分以外の全員が平然としているのを見て、私は更に混乱した。

フィンディさんのお父さんなんて、「待ってました！」とばかりに身を乗り出している始末だ。

皆が固唾を呑んで見守る中、司会者さんが陛下を促す。

「陛下、どの側妃様になさいますか」

まさかここでやるのか？ 「ど・れ・に・し・よ・う・か・な」というお殿様遊びを！

サラージアさんはどうでも良さそうな表情を浮かべ、フィンディさんは期待に目を輝かせていた。私はもちろん、啞然呆然の体である。

側妃が三人もいるのだから、その中の一人を選ぶのは仕方がない。だけどこういう秘めご的なことは、相手にだけお知らせして夜になったらこっそり部屋へ行く、というのが暗黙のルールだと思っていた。

陰の陛下には羞恥心というものが無いのか、ただ面倒くさそうに私たち三人を見ている。

実は私は陽の陛下と、ある約束をしていた。夜伽のお相手には、私を選んでもらうという約束だ。

陽の陛下は言っていた。王妃であるエレインを様を愛しているから、側妃たちとは身体の関係を持ちたくない。

でも、側妃を迎えることはすでに決定しており、中止にすることは出来なかった。だから私は、陽の陛下と約束したのだ。表向きには陛下が私の部屋に泊まっているように見せかけ、夜中にこっそり王妃様のもとへ戻っていたらいいこと。そして二人で子作りに励んでもらうことを。

とはいえ、王妃様にはその約束のことを伝えていない。お世継ぎを産まなければならないという重圧から束の間だけでも解放してあげたいと、陛下が言ったからだ。

「どなたが選ばれるのかしら」

出席者のうちの誰かがそんなことを言った。そのほんの小さな囁き声が聞こえるほど、会場は静まり返っている。

「白妃様に決まってるじゃないの、何と言っても侯爵家のご令嬢ですわよ」

また聞こえた別の誰かの言葉に、私は内心で頷いた。

陽の陛下と例の約束をした後、彼がぼやいていたのだ。「でも他の側妃のもとにも一回は通わないといけないだろうな。嫌だな」と。だから私は「寝たふりでもしとけばいいんじゃないですか？」とアドバイスしたのだった。

そもそもその約束のことが、陽の陛下から陰の陛下に伝わっているかも怪しい。彼らは人格が入れ替わっている間の記憶が抜け落ちてしまうせいで、交換日記でもない限り意思疎通が出来ないのだ。

でも、こうなってしまった以上、私はもうどうすることもできない。おそろく、今日のところは一番身分の高いサラージャアさんが選ばれるだろう。

「今夜は——」

長い沈黙の後、陛下がようやく口を開いた。皆がその口元に注目する。そして……

「今夜の相手には、黒妃を指名する」

陛下が思いもよらないことを言い出したので、しばし私の思考が停止する。けれど周囲のざわつきで我に返り、陛下の言葉を反芻した。

黒妃って……え？ もしかして……私ですか!?



「やったわね、アイーダ。早速ご指名なんて！」

「いやーん、まるで自分のことみたいにドキドキしちゃいますっ」

お風呂上がり私の身体をマッサージしながら、ソフィアさんとエルさんがはしゃぐ。

彼女たちに裸を見られるのにも、もう慣れた。いや、慣れざるを得なかったというのが正しい。

何しろ、皆おかまいなしに見るわ触るわ揉むわで、恥ずかしがる暇もないのだ。とつくの昔に全てを見られているので、もうどうにでもなれという気持ちである。

とはいえマッサージしてもらおうと身体が軽くなるし、髪や肌もずいぶん綺麗になる。特に水仕事

で荒れてガサガサしているのが当たり前だと思っていた私の手が、手入れさえ怠らなければこんなにツルツルになると知った時には、感動したなあ。

あれ？ 何だか身体にすり込まれる香油の量が、いつもより多い気がする。揉み込む手もいつになく力強いような……

と、思っていたら、いきなり太ももの辺りをグイッと強く揉まれた。

「い、痛いです！」

「あらあ、ごめんなさいね？ 嬉しくて、つい力が入っちゃうのよ〜」

ソフィアさんはそう言って一度は力を緩めてくれたものの、鼻歌を歌いながら徐々に力を増してくる。彼女はむくみに効くツボを知り尽くしているんだけれど、そこを押されると信じられないくらいに痛い。特に足首の辺りにあるツボを手の甲の骨でぐいぐい押されると、もしやメリケンサックでもはめているんじゃないかと疑うほどの激痛なのだ。

「いっ……!!」

私は声にならない悲鳴を上げた。だけど、エルさんに足首をしっかりと掴まれているので逃げ出せない。だから目と口をギョツと閉じ、枕を叩いて痛みを紛らわした。

ようやくお手入れが終了し、下着をつけようとしたら、アステイさんに「そんなものは必要ないでしょ」と取り上げられた。「これがないと貧乳がバレバレなのですが」とおすおす申し出ると、「どうせ脱いだらすぐにバレるわ」と冷たい一言が返ってくる。

確かにそうだけど、ないと何となく落ち着かないってこと、あるじゃないですか……アステイさ

んはないんですね。ああ、はい。我儘わがまま言まつてすみませんでした。

それよりも問題は、貧乳だとバレた時だ。怒った陛下に殴られたらどうしよう。まさか斬られたりはしない……よね!?

「アイーダ、これはチャンスよ。どうして今夜あなたが選ばれたのかは分からないけれど、何が何でも陛下を満足させるのよ!」

「そんな、無理ですよ」

私は自分の身体を見下ろす。貧乳で、およそ女性らしさの欠片かたがらもない身体。だからタオルで偽乳にせちちを作ったことまで来た。陛下と王妃様は相思相愛だと聞いていたので、陛下の前で服を脱ぐ日など来ないと信じて疑わなかったのだ。

陰いんの陛下が、本気で私とどうこうなろうと思っていたらマズイ。今頃人格が陽やうの陛下に戻っていたりしないだろうか。……なんて、都合が良さすぎるかな。

「馬鹿ね、部屋を暗くすれば分からないわよ」

わあ、アステイさんの笑顔が黒いです。たとえ部屋を暗くして見た目はごまかせたとしても、触まられたら一発で有罪判決が下っちゃいますよ……

そこでソフィアさんが、名案を思いついたとばかりに顔を輝かせた。

「横向きや後ろ向きになるとか! もういつそのこと、陛下の上に乗っかっちゃったらどう?」

「キヤーツ、ソフィアさん、刺激が強すぎますーっ!」

エルさんが両手で顔を隠しながら、じたばたしている。「私、恥ずかしくてたまりませんっ!」

とか言いつつも、完全に笑顔だ。

何ですかこの疎外感そがいかんは。何で三人ともそんなに楽しそうなんですか。っていうか、完全に面白がっていますね? 私なんて気分は市場へ売られる子牛だというのに……

一人だけこの場の空気に乗っていない私に、エルさんが気付いた。

「何かアイーダさん、落ち着きすぎてませんか?」

違います、元々無表情なだけです。そして皆さんのテンションについていけないだけです。

そう答える前に、ソフィアさんが私の顔を覗き込んだ。

「ほんとねえ。あ、もしかして……」

もしかして? と私が首を傾げると、アステイさんがすごい形相ぎようそうでにじり寄って来た。そりやもう、私の胸倉むねぐらを掴まんばかりの勢いで。

怖い。その顔は鬼軍曹や悪魔を通り越して、般若はんにゃへと変貌を遂げている。

アステイさんは私の両肩を掴み、がくんがくんと前後に揺らす。ひいつ、目が回りそうです!

「アイーダ! あなた、まさか初めてじゃないとか言わないでしょうね?」

「は、初めてですよ、もちろん」

私のこれまでの人生の中で、一体いつそんな機会があったと言うのだ。

それどころか、異性と手を繋いだこともなければ、キスしたことも……あ、キスはしたんだった。ジェイクさんと、一度だけ。

思い出した途端にはっと息を呑んだら、アステイさんが目ざとく気付き、私の顔を凝視した。

やばい、顔に出てしまっただろうか。いやいや、私の短所である無表情は、こんな時だけは長所
に変わるのだ。

私は平常心を装ってポーカーフエイスを保ち続ける。

やがてアステイさんは、にっこりと笑みを浮かべた。

「そう、良かったわ。でも、初夜が何たるかくらいは知っているわよねえ？」

いくらトントンカンなあなたでも——そんなニュアンスがガツツリと含まれた言葉に、私は何度
も頷く。

そのくらいは私でも知っている。保健体育の授業で習ったことがあるし、中学生の頃にクラスメ
イトの女の子たちが話しているのを聞いたこともある。私は生まれつき無表情なせいで友達がいな
かったから、参加したことはないけれど。

だけど、貞操の危機は全くとっていいほど感じていない。

それというのも、陰の陛下はおそらく私に手を出さないだろうと思うからだ。

彼がサラージャアさんたちを差しおいて私を選んだ理由は一つしかない。きっと陽の陛下から私を
選ぶようにと交換日記かメモを通じて頼まれていたのだ。

いや、でも……

私の頭に、ふと疑問が浮かぶ。

陰の陛下が、陽の陛下の願いを聞き入れるだろうか？ 今までの彼の言動から判断するに、答え
はNOだ。

もしかしたら陰の陛下は、今夜本当に私とそういう関係になるつもりなのかも……？

そんな馬鹿なと思いつつも、急に身の危険を感じた私は、わずかに身体を縮こまらせた。

まあ、一度は陛下の子供を身籠る覚悟をしたこともあるのだし、陛下がお風呂に入って清潔にし
てくれさえすれば、別に我慢できないほど嫌じゃない……と思う。

サラージャアさんも言っていたじゃないか、しばらくの間、目を閉じて我慢していれば済むのだ。毎
日お風呂に入り放題という贅沢な生活をさせてもらっているのだから、その分はきっちり働かな
いと。

だから陛下によほど変な趣味がない限り、耐えてみせよう。

それよりも、この貧相な身体を見て、陛下がその気をなくさないかが心配だ。そんなことになろ
うものなら、明日の朝が怖い。主にアステイさんの反応が。

そんなことを考えていたら、部屋の入り口の扉がノックされた。アステイさんが寝室を出て行き、
入り口の扉を開ける音がする。次いで「もうすぐ陛下がいらっしやいます」という男の人の声が聞
こえた。

え、もう？ 早すぎない？

アステイさんの「かしこまりました」という声が聞こえるより早く、ソフィアさんとエルさんが
慌ててお手入れの道具を片付け始めた。

「早速陛下がいらっしやるのね」

「私、陛下を近くで見るのは初めてですっ」

「あなたたち。そんなに騒いで、みつともないわよ。今後も頻繁ひんぱんに来ていただくことになるのだから、早く慣れなさい」

寝室に戻って来たアステイさんが、こちらに視線を寄こしながらさりげなくプレッシャーを与えてくる。

頻繁ひんぱんに来てもらえるように、何が何でも気に入られるってことですね。今夜が初体験の人に、何て無茶ぶりなんですか。

でも、そういえばシグルトさんも期待に満ちた目をしていたなあ。……善処します。

しばらく経つと扉が乱暴に開かれ、陰かげの陛下が登場した。相変わらず、扉を開けてもらうのを待てないらしい。

私には目もくれずに、陛下はアステイさんたちを下がらせた。

そして窓際に近付いて外を一瞬だけ見てから、奥のソファへどかりと座った。

「酒」

気付けば、テーブルの上には高級そうなお酒の瓶が二本ある。もしかしなくても陛下のために用意されたお酒だろう。

「はい、すぐにお注つぎします」

私はグラスを陛下の前に置き、お酒を注ぎ入れた。陛下は無言でグラスを掴み、一気におおる。すぐに空からのグラスを突き出されたので、私はそれにまたお酒を注いだ。

立っているのも何なので、陛下の向かいに腰かける。会話は一切ないけれど、別に気まずくはな

いのが不思議だ。普通、誰かと二人きりになると会話に困るものだけど、陰の陛下はそもそも私との会話など求めていないとはつきり分かるからだろう。

陛下はいつもの黒い服を着ていた。もちろん仮面は被ったままで、その腰には剣がある。

陰の陛下は周りの人を信用していないと、陽ひかりの陛下が言っていたっけ。夜に女の人の部屋を訪ねる時でさえ剣を持っているなんて、どれだけ疑心暗鬼ぎしんあんきになっているのか……

陛下はお酒を飲み続けていて、まだまだ寝そうにない。私たちの間には初夜らしい甘い空気は皆みな無なかった。

やっぱり陛下は、今夜私とどうこうなろうとは思っていないらしい。ほっとしたような、気が抜けたような、複雑な気分だ。

陛下は無言のまま、とうとうお酒をひと瓶飲み干してしまった。もう一本の瓶を開けるために腰を浮かしかけた私は、陛下がテーブルにグラスを置いたのを見てソファに座り直す。どうやらこれ以上飲む気はないらしい。

そうなるともう、私にできることはない。夜が更さらけたら、陛下は勝手に部屋を出ていくのだろう。私は立ち上がって深く頭を下げてから、一人寝室へ向かって歩き始める。

すると、背後から陛下に呼び止められた。

「……どこへ行く？」

私は一応身体ごと彼の方を向き、返事をする。

「明日も朝が早いので、寝室へ参ります」

そう答えると、陛下が言葉に詰まったことが雰囲気で分かった。

側妃になっても掃除の仕事が続けたかった私は、時々かつらを被って別人になりすまし、この宮殿の一階にある画廊の掃除をしている。

側妃披露の儀が終わったら、しばらくの間はその仕事に専念していいと、アステイさんから許可をもらっていた。だから面倒臭いダンスとマナーを勉強し、分厚い貴族名鑑も頑張って暗記したのだ。

つまり、明日からは思う存分掃除ができる。さすがに夜は勉強をしなければならぬけれど、早朝から昼過ぎまでは掃除三昧。ストレスフルな日々よ、さようなら。こんにちは、ストレスフリーな私。

そんな訳で、夜更けまで陛下に付き合っただけで体調を崩すことは避けたい。

陛下にもう一度お辞儀をして、私は寝室に移動した。

そのまま寝床に入ろうとすると、陛下も寝室にやってきた。陽の陛下と同様に、浴室の窓から縄梯子を使って、真上にある自室へ戻るのだろう。

「浴室なら、こちらです」

浴室へ行くには寝室を通らないといけないのだ。縄梯子はちょうどバルコニーの陰に掛かっているの、警備兵からは死角になると、陽の陛下が言っていた。

見送りぐらいはしないとマズイかと考えていると、陰の陛下は浴室には向かわず、ベッドの方へ足を向けた。

信じがたいことだが、どうやらその気はあるらしい。陰の陛下は陽の陛下と違って、王妃様命ではないみたいだ。

陛下は私に覆いかぶさるように、ベッドのつてきた。その身体からはお酒の匂いと、石鹸の良い香りがする。陛下も入浴を済ませているようだった。それは良いことだ。

陛下は腰に佩いていた剣を外し、サイドテーブルに立てかける。手を伸ばせばいつでも掴める、絶妙の位置だ。私が何か不審な行動を取ろうものなら、躊躇なくあの剣を振るうだろう。

だけど逆に考えれば、私が何もしない限り安全とも言える。

夜具を捲られ、陛下の顔が近付いてきても、私は避けなかった。

「嫌がらないのだな」

唇が触れるか触れないかの距離で、陛下が問う。その声には小馬鹿にしたような響きがあった。それによって、陛下が私のことを気に入らないだけでなく、蔑んでいるのだと気付いた。私が平民出だからか、それとも欲に目がくらんで側妃に成り上がった女だからか、理由は分からない。でも側妃になった以上は、目の前にいるこの人に仕えなければならぬのだ。

私は彼の機嫌を損ねないよう、努めて冷静に答えた。

「……キスは初めてではありませんから」

「そうか。では、その先は我が教えてやろう」

そのまま顔が近付いてきて、噛みつくように唇を奪われる。ジェイクさんとは全然違う、冷たい唇。そして、頬に当たる冷たい鉄の感触。



私は一瞬だけ身を竦めてしまったものの、すぐに身体の緊張を解いた。

しばらく口腔を舌で蹂躪され、その後、唇がやや乱暴に首筋を這っていくのを、天井をぼんやり見つめながら感じていた。

「どうした？ 怖くて声も出ないか？」

あまりに無反応なせいにか、陛下が再び私に尋ねてくる。私が悲鳴を上げたり嫌がったりするのを期待していたのだろうか。

「実は、あまり怖くはありません」

未知の領域に踏み込むことへの戸惑いは、確かにある。けれど、恐怖ではないと思う。

私は陛下のことが好きな訳じゃないし、陛下も私のことなんて子供を産ませる道具くらいにしか思っていないだろう。好きな人じゃないなら、相手は誰であろうと一緒だ。むしろ好きな人が相手なら、私は今頃緊張のあまりパニックになっているはず。

お互いに気持ちが悪ければ、ただの身体的接触に過ぎない。そう考えたら、戸惑いの気持ちさえどこかへ消えていった。

今、私の心は夜明けの海のように凪いでいる。ただ一つ心配なのは、陽の陛下が後でこのことを知ったら、どう思うだろうかという点だった。

自分が王妃様以外とそんな関係になったと知れば、きっと彼女と今までのようには話せなくなる。王妃様の方も覚悟していたこととはいえ、心穏やかではいられないだろう。

ただど側妃である私に、陰の陛下を拒否できるはずもない。

全ての批判を受け入れようと決意し、私は目を閉じた。すぐ近くに他人の体温を感じる。ああ、陛下はちゃんと実在していて、温かい血が流れている人間なんだな、と思った。

もちろん幽霊だと思っていた訳ではないけれど、私にとって陰の陛下は陽の陛下と違って、どこか現実味のない存在だったのだ。

「面白い女だ。他の女たちとは一味違う」

陛下が微妙に笑った気がした。それは褒め言葉なのだろうか。

私は目を開き、陛下の冷たい仮面を見上げた。すると、その下にある口元がはっきりと歪む。

「……とも言うと思っただか」

「え……？」

「少しでも怖がれば力づくで抱こうと思ったが、お前は人形のようにつまらん。それに、女なら間に合っている」

それは王妃様だけで十分満足しているということか、それともよそで楽しんでいるということか……どちらかというと後者な気がした。

陛下の相手をする女性は、王妃様以外にもいるのかもしれない。そして、おそらく陛下はその女性たちを何とも思っていない。好きだとか、気が合うとか、そんなことは考えたこともなさそうだ。

ギシ、とベッドがきしむ。陛下は身を起こし、乱れた衣服を整えた。彼が剣を再び手に取ると、硬質な音が静かな室内に響く。

そして陛下は再び窓際に寄り、窓の外を窺った。

「警備兵が移動した。部屋へ戻る」

陛下は私の方を見ずに言い、すたすたと浴室の方へ歩いて行く。あまりの変わり身の早さに驚き対応が遅れたものの、私も慌てて起き上がった。そして衣服を整え、陛下の後を追う。

陛下が浴室のカーテンと窓を開けると、窓から一気に冷たい風が吹き込んで来る。そこには予想通り縄梯子が下がっていた。この部屋に来る前に下ろしてきたに違いない。

彼は窓枠に足を掛け、縄梯子を掴んだ。そしてためらうことなく上っていく。いつかの夜のよう

に、私は窓から身を乗り出して陛下を見上げた。

「陛下。陛下はどうして今夜、私を選んだんですか？」

「あの者との契約だ。……だが、それも今回限りだ」

そう言うと、陛下は再び縄梯子を上っていった。

あの者というのは王妃様か、それとも陽の陛下か。陛下が無事に部屋へ戻るのを確認した私は、乱れたままのベッドへと戻りながら、人知れず溜め息をついた。

——長い、一日だった。



翌朝目覚めると、朝ご飯と一緒にたくさんの箱が部屋に運び込まれた。

またシグルトさんからのプレゼントだろうか？ と首を傾げていたら、アステイさんが急に抱きついてくる。

「ああ、アイーダ。あなた、やったわね！」

まるでラグビー部の人にタックルされたかのような激しい勢いに、私はぐえっと悲鳴を上げた。一体何事だろう。

「ど、どういうことですか？」

そう尋ねると、アステイさんはゴホンと咳をした。箱を運んできた男性の使用人さんたちがまだいるのに言葉遣いを改めていなかったことに気付いたらしい。完璧主義者の彼女にしては珍しい。よっぽど興奮しているみたいだ。

その後ろで、ソフィアさんとエルさんも飛び上がって喜んでいる。だから、一体何なんですか。早く説明してください。

アステイさんによれば、これらは初夜を無事に終えた翌朝に陛下から贈られるもので、これらが贈られて初めて名実ともに側妃になるらしい。贈り物が届くのが早ければ早いほど、品数が多ければ多いほど、陛下が満足したという証なのだとか。

今、私の目の前にある贈り物の数は尋常じゃないほど多い。つまり、私と陛下が昨夜すっかり肉関係を持ち、そして陛下は私に大変満足したと、周囲は判断するそうだ。

ああ、だから皆こんなに喜んでいいのか。でも、実際は何もなかったのに……もらってもいいの

かな？ というか、陛下はなぜこんなことを？

彼の真意を測りかねている私をよそに、侍女三人は、まるでクリスマスとお正月が一緒に来たかのような大騒ぎだ。

やがてアステイさんが、私に囁いた。

「これでアイーダ様の地位は盤石なものになりました」

「……それはつまり？」

「一・生・安・泰、でございます！」

最初は小声だったのに、徐々に声高になっていくアステイさん。

彼女の話によれば、今後、たとえ陛下に何かご不幸があったとしても、私は新しい王から保護を受けられるそうだ。つまり年金をもらいつつ、悠々自適な老後を送れる……みたいなことだろうか？

いつまで生きられるかは分からないけれど、とにかく寿命が尽きるまでは生活費の心配がなくなると聞いて、私も嬉しくなった。何よりお風呂三昧の生活が保障されるのが嬉しい。

皆でハイタッチでもしたい気分だ。ああ、権力万歳！ お金持ち万歳！

あれ？ 荷物を運んできてくれた使用人さんたちが、恐ろしいものを見るような目でこつちを見ている。どうやら、一生安泰という言葉で喜ぶ私たちに恐れをなしたらしい。あ、目が合った途端に視線を逸らされた。

別に怖くないですよ。つい女の本音がポロリと出てしまっただけですよ。だから引かないで

くださいね。」

そんな私の必死の願いも虚しく、全ての荷物を運び終わると、彼らは慌てて出て行った。

「で、どうだったの？ アイーダ。陛下との初夜は」

「キヤッ！ 聞きたいけど聞きたくないような……乙女心は複雑ですっ」

ソフィアさんとエルさんが、興味津々な様子でにじり寄って来る。聞かれる立場というものに慣れていない私は、思わずタジタジになってしまった。

「そ、それより贈り物を見ましよう！」

私は話を逸らすため、山積みになった箱を指差す。

箱の中には数えきれないくらい装飾品が入っていた。そのどれもが丁寧に細工されていて、見るからに美しい高級品だった。

まだ清らかな身体を持つ身としては、品物が高価であればあるほど心苦しくなる。なので私は自分から見ようと言っておきながら、早々にそれから目を背けてしまった。

侍女三人はこれから贈り物の目録を作り、いつでも取り出せるように整理しなければならないらしい。

それを私が手伝う訳にもいかないようなので、あとは三人に任せて掃除をしに行くことにした。

女中の制服を着て茶髪のかつらを被った私は、宮殿の一階にある画廊へと向かった。

入り口のそばに、警備兵さんが一人いる。俯いて前髪で顔を隠しながら挨拶すると、相手は直立

不動のまま挨拶を返してくれた。

画廊の中に入って扉を閉めた後、私は安堵の息を吐く。そして、いよいよ仕事に取り掛かった。

いつものように壁を拭いて、美術品の埃を払い、お茶がらをまいた床を掃く。この掃除にも慣れて要領を得たせいか、お昼になる前に終わってしまった。

はつきり言って全然物足りない。もつとわしやわしやと全力で掃除がしたい。そう思い、他に掃除できるところはないかと顔を上げた時だった。

「まあ、こんなところにこんな素敵な場所があったのね」

入り口の扉が開いたかと思うと、そこから現れたのは、赤妃のフィンディさんだった。

私は慌てて壁際に寄り、頭を下げる。掃除はすでに終了しているので、彼女が私の前を通り過ぎるのを待つてすぐさま退出しよう。

フィンディさんは侍女さんを従え、目を輝かせて美術品を眺めている。どうやら彼女は芸術への造詣が深いみたいだ。

「ねえ、あなた」

さりげなく退室しようとした私は、フィンディさんに呼び止められてしまった。

「……何かご用でしょうか？」

「この掃除は、全部あなたか？」

「は、はい」

「わたくしの部屋も掃除してもらえないかしら？ どうも仕上がりに満足できないんですの」